

天沼小だより

文責

校長 大里 忠弘



2学期のスタートです



夏休みが終わり、今日から2学期の始まりです。家庭・地域の皆様のおかげで、子どもたちは無事、元気に2学期を迎えることができました。

無事、元気にと申したものの、私たちは今、新型コロナウイルス感染症との戦いに加え、年を追うごとに暑さの度合いが増し、連日の酷暑という、例年にない過酷な夏を過ごしています。帰省や旅行なども、

思うようにできなかつたご家庭もあり、不完全燃焼の夏休みであったかも知れません。そうした経験、体験をすべて学びとして受け止め、前を向いて進んで行きましょう。

学校では各所の消毒、換気その他、3密を避ける方策を講じるなど、新型コロナウイルス感染症対策の徹底を図って参ります。しかし、1学期の様子を見る限り、子どもたちはどうしても互いに近づきます。親しく会話もします。若者のイベントや会食の場での感染が疑わしいとの報道などをみると、子どもたちの学校内での濃密接触は問題ないのだろうかと不安になります。学校内には新型コロナウイルスは持ち込まれていないとの前提で考えれば、子ども同士が近づくことでコロナが発症するものではありませんから、過剰にヒステリックになる必要はないのかも知れません。しかし、無症状の感染者も多数いるという状況を考えると、やはり、新しい生活様式の意識をしっかりと育てることが大切だと考えます。

マスクをつけることの意味、ソーシャルディスタンスをとることの必要性、手指や衣服についたかも知れないウイルスを体内に入れないためのリスク管理、などについて、生活習慣として定着させるための意識づけが必要です。

併せて、人は皆同じではないということの理解も大切です。マスクをつけることのできない事情を持つ人もいます。そうした人を受け入れるという、多様性に対する寛容です。

「感覚過敏のためにマスクをつけることのできない自閉症の子が、マスクをつけた母親の顔を見てパニックを起こしてしまう」というニュース記事を読みました。この親子はマスクをつけずに外を歩くことになります。特別な事情を知らない世間の人々は、二人を「非常識な親子」と決めつけ、避難さえしてしまう危険があります。

経済成長と生命の安全性の優先順位、自分優先と周りの人への配慮、マスクをつけられない事情といった多様性への理解など、今回のコロナ騒動を通して、私たちはたくさんのことを学びます。そうした学びや新しい気づきこそが、人類の共生社会の成熟につながるのだと思います。学校は次世代をつくる人材を育てる場です。子どもたちの命と心の安全を守ると同時に、子どもたちの未来をより豊かなものにするための取り組みをすすめていきたいと考えています。

各ご家庭におかれましても、新型コロナウイルス感染症対策に一層のご留意をいただき、2学期の授業、学校行事等が計画通りに実施できますようご協力をお願いいたします。

